

科学哲学会 2025 年度大会シンポジウム「科学哲学と公共政策」

オーガナイザ

伊勢田哲治（京都大学）

登壇者

祐野恵（京都大学）

杉谷和哉・清水雄也（岩手県立大学、京都大学）

清水右郷・野内玲（宮崎大学、広島大学）

特定質問者

松王政浩（北海道大学）

松井隆明（東京大学）

企画趣旨

近年、証拠に基づく政策決定（evidence-based policy making, EBPM）という考え方の重要性について認識が広まる中で、政策決定に関連するエビデンスとはどのようなものなのか、エビデンスは政策決定においてどのように用いられるべきなのかといった、EBPM の原理的な問題がクローズアップされるようになってきた。そうした議論の中で、エビデンスや因果推論にまつわる科学哲学の知見も参照されるようになってきている。科学哲学の側からもそうした動きへのレスポンスを行うことで、EBPM と科学哲学のよりみり多い関係が期待できるのではないかと思う。

また、近年科学技術政策において「メタサイエンス」、すなわち科学を対象とした科学研究をベースに置くことの重要性が認識されつつある。メタサイエンスは当然ながら多様な分野からなる学際的領域であるが、科学哲学はこの領域の核となる知見を提供できる分野であり、ここでも科学哲学の役割が期待される。以上のような状況をふまえ、EBPM や科学技術政策における科学哲学の役割について一緒に考えるシンポジウムにしていきたい。

構成としては、まず、オーガナイザの伊勢田が基本的な問題設定を説明する。その後、EBPM を専門とされる祐野氏の講演で、日本における EBPM の実際について、科学技術政策を中心とした紹介をいただく。次に、杉谷氏と清水（雄）氏が共同で EBPM における科学哲学的知見の利用、とりわけカートライトの因果論の EBPM への影響について、清水（右）氏と野内氏が共同で科学技術政策の哲学的視点からの分析、特に再現性の問題についてそれぞれ講演する。

特定質問としては、自身も温暖化科学や地震研究などの政策的含意について科学哲学の観点から論じてきた松王氏、科学哲学史的観点から松井氏にそれぞれ質問いただき、登壇者同士での意見交換を行う。最後にフロアからの質問を受けつつディスカッションを行う。